スクール・バトラーズ 【ＳＢ】

ATR・∞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スクール・バトラーズ　【ＳＢ】

【Ｎコード】
Ｎ９１１５ＣＡ

【作者名】
ＡＴＲ・∞

【あらすじ】
スクール・バトラーズ？？？？ＶＲＭＭＯＲＰＧに対抗するため作られた新ハードのゲーム。
主人公で中学生の学はそのゲームで戦美部のメンバーと共に最強を目指して日々戦い抜く！
学「え？勉強よりゲームですよ、ゲーム！」
学の運命はどうなるのか！？

序章（前書き）

かなり短いです！そして初見だとこの序章はまったくといってもいいくらいわからないと思いますが時系列さかのぼるのでなんとなーく理解してください＜（＿＿）＞

序章

「ぐはっ！！」

ヤツの四刀「黒」が僕に突き刺さる。この世の痛みとは思えない痛みが襲ってくる。

目の前にポップが出現しリタイアを促してくる。

これ以上は無駄な戦いなのか？答えはＮＯだ……まだ僕はヤツになんの仕返しもしていない。

ただでさえ立つのが精一杯な僕に対してヤツは間合いをとり不敵な笑みでこちらをみて言い放つ。

「所詮その程度なのか？やはりいつまでたっても変われないんだよ、いじめられて育った腐りきった弱々しい心はな！！」

その言葉と同時にヤツの剣が一瞬黒く光る。そして剣から限りなく黒に近い赤色のオーラが発生する。

僕は確信した？？？ヤツのＯＳがくると。

【ＯＳ】こと【Ｏｎｌｙ　Ｓｋｉｌｌ】全ユーザーで所持可能が１人の「オンリースキル」は、普通のスキルと違い、誰でも習得できるわけではない。

不幸中の幸いかヤツのＯＳは一撃必殺並の能力を誇るためかチャージ時間が長い……なら！

僕は相棒を強く握りなおす。そしてあまり残されていない時間を極限まで活用して剣に力を込める。

腹から叫ぶ、禁忌の技にして僕のＯＳ？？？《オーバー・グラビティ・クロス》！！

一撃だ……この一撃にすべてがかかっている。

この一撃が入れば勝つ、入らなければ負ける……行くぞっ！！
「うらぁぁぁ！！！」

疲れ切った、ボロボロな体で間合いを確実に詰める……その距離剣一本分。
その瞬間、ヤツの剣が再び黒く光る。チャージ終了のサインだと悟る。
そんななかヤツは叫ぶ、見下すような声で。ヤツは笑う、見下すような表情で。
「くたばれ！雑魚中の雑魚め！！《ブラッド・パーク》！！」
《ブラッド・パーク》ヤツのＯＳにして全ユーザーに知られてるといっても過言ではない強力な全５連撃による超特殊攻撃？？？？
左、右と切り上げ、一度ためてからの左、右と今度は水平切り、フィニッシュは突き。
全ユーザーとしての共通意識はこうだ？？？？左右からの切り上げは剣に威力はあっても重さはないため剣同士のぶつかり合いで強引にスキルを止める……と。
当然のことヤツの筋力や戦闘技術、戦闘系スキルによるパラメーター補正を考えるなら無謀だがチャンスはそこしかない。

？？？？だが、僕はそれを回避する？？？？

その瞬間ヤツの目の色が変わる。なぜ回避した、とでもいうように。会場の観客に目を配る余裕はないが雰囲気で理解する。なぜスキル停止を狙わなかった、と。
これほど緊迫した試合だからかヤジなど飛んでこないものの普段ならば間違いなく非難を浴びるレベルだろう。
もうすでに僕の勝利を絶望的だと判断する者もいるだろう。むしろ中堅以上、一度でも対戦したユーザーなら察する。無理だ……と。
でも、それでも僕は。確かに相棒を強く握る……。

全体でいう3撃目、左からの水平切り。
スキル停止できなかったユーザーはここで決断に出る。
2撃目から3撃目の間にある溜め時間、防御か攻撃か。
防御ならば結界などを張らない限り不可能な威力であり、結界など僕には作れない。
攻撃ならばそれこそ捨て身で全力攻撃だが短い時間の中でヤツのボス並のHPを削れる気は沸きもしない。
HPを削るまではいかなくともスキル停止できるかどうかというとこだろう。

?????だから僕はここでも攻撃せずスキルを発動する。《エンペラー・タクティクス?》?????

ただし例外的なのは声に出さずにスキルを発動する。
これに限ってはプレイヤースキルといってもいいのだろう《ビジュアル・ダークネス》
スキルを声に出さずに発動する行為を表す……が、まともにこれをやっているのは少人数だ。いや、できないのほうが表現としてはあっているが。

「ッ!?」

明らかな動揺が見える。なんせ相手から見たら僕は相手のチャージ時間にただ目を細くし立っているだけなのだから。
「舐めた真似しやがって……もっと楽しませやがれ!!」
《ブラッド・パーク》チャージ終了か、ヤツは左からの斬撃に移る。
同タイミングで視界の右隅に《?・チャージ終了》のテロップを見逃さずヤツの斬撃を極限まで無駄を減らした回避を行う。
「く……そっ!!」

わずかなダメージ判定。おそらくかすってしまったのだろうか、疲れ切った体に与えるダメージはそれこそ心がおれるようなダメージだった。
なんとなく記憶が飛びそうな僕はそれでも必死に心で叫ぶ《エンペラー・タクティクス？》と。

そんなことお構いなしにヤツは次の連撃に移る。
ここで僕は【二刀流】にするために輝刀をとりだす。若干のペナルティがつくため望ましくはないが強引に輝刀を構える。
そしてヤツの４撃目に移る間に今できる最後の行動を行う。
《アルティメット・アクセリレーション》と小声でしかし気合を込めてつぶやく。
発動した瞬間に《？・チャージ終了》のテロップが流れる……この瞬間だ！！

「《エンペラー・タクティクス、フルリリース》！！」

そしてヤツの攻撃を正面からまともに食らう。
「なんだっていうんだ……お前は何がしたいんだ！？」
ヤツは動揺を隠しきれていない、当然だろう。こんな高威力のスキルを食らいに行くバカはいない……これこそ待ちに待った瞬間だ。
ヤツがいくら現実でのリアルファイトが百戦錬磨だろうといえどこれは【ＳＢ】。
この１年間だけならだれにも負けないほどやりこんだ？？？？そう……僕は。

？？？？僕はもうあの頃の僕じゃないんだ！！！

その声は心で放ったつもりが会場中に全身からの光とともに放たれた？？？？

序章（後書き）

次回から本気。時系列さかのぼります！

ｓｔａｇｅ１（前書き）

ここから本編（' ω'）

stage1

ＶＲゲーム―？？？今現代で一番売れているゲームといっても過言ではない、最強のジャンルである。
なかでもＶＲＭＭＯＲＰＧは世界中のユーザーを虜にした。なんせ誰もが願ったゲーム内へのダイブ機能。
直接動かし戦えるスリルと興奮。すべてが刺激的でとても面白い。
しかしある男は呟く……
「このままでは身体能力が低下する……」
男は考えていた。ＶＲＭＭＯＲＰＧは魅力的だ……だが、だからといってこのままではただでさえ遅れを取っている日本の軍事力にすさまじい悪影響を生み出すと。
しかしＶＲＭＭＯＲＰＧをなくせば経済に与える影響は計り知れない。
そして男はある作戦を実行する―？？？

＾＾＾

電話がかかってきた、いや正確には録音されている声だったが。
「―？？？？学、元気？生きているならここに来なさい―？？？これは命令よ。」
とだけのこすと電話は切れた。

―？？？母は生きてはいない。そう一年以上前に聞いた。

なら行く価値などない……が、じいちゃんが珍しく行けとうるさかった。
そんな回想に浸っていると突然車内アナウンスが鳴った。

「―？？？え～みなさんこんにちは。総理大臣の軽井　慶介です。」
珍しい……あの総理が……。
現総理の軽井　慶介は歴代最高のちゃらさを誇っている。
ピアスや髪の色染め……別にそんなことはしていない。だがちゃらい。
そういえば総理になった直後あくびしながらインタビュー受けていてすごい波紋をよんだな……。
だが対照的に歴代最高の支持率をもっている。
その波紋を呼んだインタビューであくびしながら「まぁ～外交関係はよくするから安心して仕事してなよ～」といいわずか二週間後に海外との問題は8割近く改善され、国民は目が点になった。
それ以降も景気の向上や、国内のいたる問題を解決していき支持率は上昇していった。

「あ～いつも通りでいいって？やったね！」
うん、これが普通だよね……知ってます。
おそらく生放送なのだろう、声しか聞こえないが総理の周りには人が多くたっている……そりゃなにしだすかわかんないもんなぁ。

「えーっと国家プロジェクトとしてなんと日本から宇宙に向けて研究施設を発射することが決まりました～！お～ハイ拍手～！」
おぉぉぉ！！！
電車内で声があがり拍手が起きる。確かにこれはすごいな……。
「そしてその発射が実は今日行われるんだよね～てなわけでカウントダウン行きますよ～。モニター全部それにするから一緒にカウントよろしくー！！」
ちょいちょい総理！？気軽に全部支配してるの！？
あ……僕のスマホ画面にも出てきたよ……
『１０秒前！！』
みんなが一斉に声を出す。普段なら静かに近い電車内だがアナウンスが流れる。やっぱ電車は静かにしないとね！

「国家プロジェクトですので声を上げてかまいません―？？？」
『うおぉぉぉぉ！！ＮＩＣＥ！！車掌！！』
なんでだよ！？よくないだろ！？！？
そして電車内は一気に宴会モードに変わったようにうるさくなる。

『３！！！２！！！！！１！！！！！！はっしゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！』

画面には生中継の映像が流れている。
確かにスペースシャトルに近いようなものが発射されていく。
あの中には様々な研究施設と研究者が乗っているのだろうか？いったいどんな実験が行われるのだろうか。僕がそんな妄想に浸っていると駅に着いた。

この駅にはほとんど人が降りない。それはここ一帯には国家の研究施設ばっかが並んでおり降りても何の楽しみもないからだろう。

―???徒歩わずか7分。
僕は目的の病院に着いた。
そこには立ち入り禁止の看板と門番の警備員さんがいた。まったく……なにをどうしたらこんな警備をひかなくてはいけないのだろうか。
そうおもいつつも立っているだけでは不審がられるので警備員さんに話しかけることしかできなかった。
「あ、あの。これ」
そういい僕はカバンから通知はがきを見せる。母からの電話後1通のはがきが送られていたのだ。
シールが貼られていてそれはめくってはいけないそうで見えたのはNO.５０００の文字だけだった。
「おぉ…これは。ちょっとまってな、いまから上に電話するから。」
そういい２０代後半のおっちゃん―??警備員さんは電話をかけている。
見渡す限りビル、工場。車は0。歩道に人など歩いていない。門から見えるとこには車がたくさんとまっているから出勤後なのだろうか、人の気配がとにかくない。

「おまたせ、とりあえず迎えのものが来るからそれまでおっちゃんの相手でもしてくれや」
そういうおっちゃん―??警備員さんにはどこか見覚えがある気がした……が気のせいだろう。
「警備員さん、なんでこんなにも人がいなんですか?」
「まぁあれだ、観光施設もないし、中の人間はほぼ外に出ることないしな」
「ほぼ中にいるって!?それ労働基準法とかどうなってんの??」
「坊主難しい言葉よく知ってるな……いいんだよ、これは労働じゃない。いわゆる趣味に近いし強制じゃなく有志だからな」

つまり中の人たちは自分から好んでこんなとこに閉じこもってんのか??

そんなことをはなしているとスーツを着た男が中からでてきた。
「うい～っすお疲れさま～これ俺からの差し入れ～」
そういいスーツの男―??:いや、総理大臣は警備員のおっちゃんにアイスを渡す。
この人は間違えようがない……総理だ。このテンションといい、この雰囲気といい総理に間違いない……。
「お～助かった。ってなんでお前こんなとこいるんだ……さっきまで生放送でてたろ……。」
「いや～あれここのビルで撮影してたんよ～さすがじゃね?この情報のセキュリティ!!」
このひとはつくづく子供のように思える……それでも行動力は確かなだけに何とも言い難い。

とここで総理が僕に話しかけてくる。
「君があの……そうか、大きくなったな……案内しようついてきたまえよ学。」
「は、はい……」
なんだこの違和感は?僕と昔にあってるのか?いや……そんなことはないはずだけど……。

ビルに入るとそこは別世界だった。信じられないほどの冷房がかかっている。
「すまないな、どうしてもＰＣなどの熱がすごくてね～まぁ冬だと思って我慢してくれ!」
確かにさっきからすさまじい読み込みの音が聞こえる……地鳴りに近いぞこれは!?どんだけＰＣやサーバーを起動してるんだ!?
エレベーターが開く。中には誰もいない。そもそもここは病院とい

うはずだった、あのはがきには。
しかしなかには患者どころか医者さえいない……。ちらほら見かけたのは開発に忙しそうな人たちだけだった。
「ところで……君。」
いつもの総理からは考えられないトーンで話しかけてくる。
「君は……勇者になりたいと思ったことはあるかい？」
「え……？」

エレベーターは動き続ける。そう……時間は待ってはくれない。いつだって、誰だってそれは変わらない。時間は皆平等だ―？？？いじめとは違う。
僕は小学校のころいじめられていた。そのせいで中学校はみんなとは違う中学に決めた。
そして何度も願った。勇者がいれば……僕を助けてくれるヒーローが、と。
ちょうど四年生の時いじめられた僕は勇者を求めていろんなゲームをした。
しかしどんなゲームをしても僕は僕のままで変われない。それは当然で、よくニュースで「ゲームの影響を受けて性格が荒くなった」という。
実際そんなことはない。どうあがいても現実と想像は一致しない。
どんなに強くてもゲーム内のアバターが強くなるだけ。僕はそれを小学生で学び結局現実に希望を捨てた。
ゲーム内でも生産職に回った。生産職なら勇者にはなれなくても……誰かを救うことはできた。
だけど僕はいまでも心のどこかで求めている―？？？理想の勇者を。

そんな図星な言葉をかけられた僕は一瞬ためらったが発言する。
「僕は……なりたい。誰もを救える勇者じゃなくていい。弱い自分

を……救える強さと優しさをもった勇者に。」
「そうか。」
そう一言呟くとエレベーターに沈黙が訪れる。
ただただ静かに、ただ着実と上へと進む。

『―???99階です』
そうアナウンスが告げるとドアが開く。
そして目の前には見渡す限り精密機械がならんでいた。
「そこの椅子に座って頭にこれをつけたまえ。」
それはたくさんのコードで繋がれていた……あからさまにこれやばくない?
と察したのか、お茶を一口飲んだ総理はいつも通りのテンションで話してくる。
「あ~大丈夫!それ安全だよ~??信じられないならいいけど、製作者言ったらしんじられるかなぁ?」
「……」
僕は黙り込む。正直な話これは怖い……有名な医療者かVRゲームのハード製作者が出てこないと……。
と、思っていた僕の思考は全く違う方向で予想外となった。

「それを作ったのはYUI―???そう、君の母だ―???―??

stage2

「それを作ったのはＹＵＩ―？―？そう、君の母だ―？？―？？

驚きのあまりに声をなくす……何を言ってるんだこの人は。

だって母は死んだって。そう僕は確かに聞いた。

「あ～そういえば昔亡くなったって連絡されてたんだっけ？いや～

それについては謝るよ～これは国家プロジェクトなんでね～」

「あの！それで母は今どこに！？」

そういうと総理は上を向き遠い目で答えた……。

「彼女なら今、宇宙にいる。」

「それって！？朝の！？」

総理は静かにうなづく。

「本当なら君に会わせたかったんだが彼女はそれを許さなかったんだよね…録音テープを取るところまでが僕の権限でできたことだ。

これについては謝るよ。」

「あ……いえ、そんな。」

正直許せないだろう、母が死んだといい５年、再会できるチャンスをつぶされたのだから。

しかし総理からこんなに謝られたなら許すしかないだろう、母が会わないことを願ったんだ。

「それで話を戻そうか～その機械は製作者ＹＵＩ、君の母が作ったものだよ？どれだけ彼女がすごいかは君も知っているんじゃないかな？」

そう母は家にある精密機械は自作、数々の技術大会にて優勝、世界でもトップレベルの技術をもっていた。それは紛れもない。

「それで、これはいったい何をするんですか？？」

「そうだったね～説明がまだだったか～君には国家プロジェクトに参加してもらう！！」
「は……はぁ！？」
「まぁ安心したまえよ～！国家プロジェクトといっても君はゲームをするだけだからさ！」
というと総理は手元にあった一枚の紙を僕に渡してきた。

＾＾＾

最初はロゴが流れる……いたって普通なゲームっぽい感じ。これは編集だからなぁ。

だが驚いたのはそのあとだった。

現れたのはただの野球球場。だがそこに光が一瞬光ったと思うとそこはデュエルフィールドと化した。

剣を振る人もいれば、魔法を唱える人もいる。中にはドラゴンを召還してブレスで焼き払ったり、巨大魔法陣を設置する人。それを見ている観客たちが映し出される。

だがなんだろうか、この違和感は。明らかに戦ってるのは中学生、いや小学生っぽい人もいる。だがまさにゲームのように戦っているのだ。

剣が刺されば痛そうな仕草……いやあれは痛がってるが、血は全く出ていない。

そしてシーンはわずか二人になり剣と剣をぶつけ合ったとこで今度は島の映像に切り替わる。

島の港ではペットに乗って遊ぶ人や、海に入って遊ぶ人が見られる。特に現実と変わりがない……はずだがそれは違った。そのペットが現実味ないのだ。

ちいさいドラゴンや、精霊、中には恐竜までいるという状況。こんなの現実であったら速攻逃げなくちゃいけないレベルだ。

リゾートっぽいとこのシーンが終わるとこんどはダンジョン。

宝箱を探す男女二人のプレイヤーの映像が流れる。

あぁリア充爆発しろ！とおもったら罠にかかって爆発したのをみて笑いまくってしまったがなかなかゲームの再現度が高かった。

なんせボスの部屋の威圧感は最高だった。自分の身長より高いモンスターに対し女が支援魔法を詠唱し男がドラゴンにのって敵の頭から真っ二つに切り込むというアクションは最高の爽快感だった。

最後に見たのはお祭り会場的な感じでユーザーが商売をしていたり生産スキルで物を作ってるところだった。
これのクオリティは生産職をやりこんだ僕としてはすごく評価できる内容だった。
一つ一つを単純にレシピ化するのではなくものによっては隠し味的要素で追加アイテムをいれたりでき、作業ゲーではなさそうだ。
なによりも一番惹かれたのは【フルサポートシステム】だ。
例えば普通のオンラインゲームなら剣を作るにはインゴットを何個。と表現され、その組み合わせでしか剣は作れない。
……が、このゲームは「剣を作る」というコマンドがあり条件、この場合なら鍛冶スキルをもっていればどんな素材でも作れる。
さらに魔法と魔法を組み合わせることも、魔法自体の設定さえも変更が可能だそう。
なぜフルサポートシステムかというと世界で1位の実績をほこる高度ＡＩとゲームプログラマー１０００人態勢で処理しているためＡＩが予測不可能、つまり「剣を作る」なのに素材に爆弾をいれた結果をプログラマーが処理するという具合だそうで人知を超えるものでなければ対応が可能らしい……すごいな。

結論をいおう。やりたい、すごくやりたい！！
「じゃあ被っていいですか??」
「おぉ～ＰＶさまさまだね～でもその前に適正アンケートとるからこれ答えてね～」
渡されたのは両面印刷のＡ４用紙４枚ほど。
そこにはさまざまな質問が書かれていた。
主に過去の記憶をえぐるもの、未来への願望や今の生活への不満。
終わってみれば僕の過去は辛すぎて涙が出そうだった。まったく……。

「あとこれ、彼女から君にだってさ」
そういわれて受け取ったのは一枚の写真とメモだった。
―?―?学、あなたなら強くなれる。私は信じています。
というメモとともにあった写真は家族写真でもなく母の写真でもない。
それは僕が小学生になったとき母と描いた空想上のキャラだった。

覚えている。僕はそのキャラに恋をしていた。
強くはない、けれど誰よりもやさしく見守ってくれる人。
それは母にとっても、僕にとっても目指していたものなのかもしれない……自分が情けない。自分だけを守れればいい勇者なんて勇者でも何でもない。

―?―?僕は。僕は勇者になる。強くなくていい。誰にも優しく手を差し伸べれる勇者に。

「さて。始めるよ～それを被ってしばらくすれば終わってるからね～」

確かな決意とともに僕は夢に落ちた―?.?.?.?.?

stage3

「――――いったいいつまで寝ているつもりかな？」
頬をつねられ目が覚める。
やたらと長い時間寝てしまっていたようだ……時間は１２時を過ぎていた。
「もう終わったから帰りなさい。無事適正テストおよび新規登録には完了したからこれを渡しておく。それから……」
と総理が僕にカードを渡したとこで言葉に詰まる。
「あの…何か問題でも？？」
「いやそういうわけではないんだ。私からユーザーに渡すのは始めてなんだ。はいこれ。」
そういうと何やら腕輪のような機械を渡された。
「そこに今渡したカードを差し込むとゲームの世界に入ることができる。その腕輪は大事にしてくれ。」

そういわれまだ実感ないものの腕輪を左腕につける。カード自体はＳＤカードほどのもので、というかむしろＳＤカードみたいで。腕輪に関してはアイフォン並みの液晶が用意されている……かっこいいじゃないか。
「そうだな……君の学校は華洋区だったね～ほぼ島だしヘリを手配するから屋上まで案内しよう。」
と、わざわざ僕に対してそこまでしてくれる総理に疑問を抱く。
「なぜ、そこまでしてもらえるんですか？」
「それは…まぁ君にも後々わかることだ。」

そして屋上につくとしっかりとヘリが手配されていた…やっべぇ、なんて権力…。
改めて総理だということを実感しながらヘリに乗り込む。

「総理！ありがとうございました！！」
ヘリの音に負けないよう全力で声を出す。
総理に声が届いたのか手を振ってくれた。

「きっと彼なら―？？？？？？―？？―？？？？
総理はヘリのいなくなった場所をながめ呟いた。

＾＾＾

「なにやってんすか……しかもこれ校内の防犯カメラ…」
「……二年、高木　夕。よろしく。」
と、必要最低限の言葉は喋らないとでもいうかのように背中を向けたまま挨拶してくる。
なんだよ…なんか嫌な態度だな…
「…別にこれが普通。早く慣れて。」
と心を読み取られた。なんだよこの人!?
僕が若干おびえてるとさっきの美青年が話しかけてくる。
「ガク！いきなりで悪かったね！実は僕たちスクール・バトラーズをやってるんだ！」
「…はい？」
話がいきなりすぎる…えっと確かあれはまだ一般公開されてないいわゆるβテスト状態のはずなのにこの二人はやっていると??
「…難しい話はしたくない。准、ガクをいつもの場所へ。」
「りょうかーい♪」

すると連れてこられたのは屋上。
さっきここで気を失ったんだよなぁ…。
「まず手荒な真似をしたのは僕から謝るよ。でも大事なプレイヤーを安全に手際よくやるのにはあれしかなかったんだ～ごめんね！」
と終始笑顔。もうどうでもよくなってきた…。
「じゃ！とりあえずさっそくやりますか！！」
そういうと准と呼ばれていた美青年は腕輪にカードを差し込んだ。
おっと、僕もやらないとかな??
そう思いカードを差し込む。すると液晶に大きくロゴがでると目が痛くなるほどの光が発せられた。

「っ！?」
目を開けばそこは屋上であって屋上ではなかった。

屋上のタイルだった床は金色の床に変化し、さっきまでただの石の建造物のようなものたちは鍛冶、料理、木工…さまざまな生産施設へと進化を遂げた……。
なんだこれは…僕はいつからＶＲゲームにログインしたんだ?それとも転生したか!?
そんな風にきょどっていると美青年は笑った。
「ははははは!!ガクおもしろいね～そんなガクガクしなくても…ははは!!」
笑いすぎている…しかもギャクはさんで満足げな顔してるし…。
そんなことを思っていると視界の中央にポップが表示される。
―これより、ユーザーデータを作成します。

うお…これはもうＶＲゲームと変わんないとおもっていいな…よし!切り替えろ僕!!
―最初に名前を決めてください
美青年はさっきの笑いが止まらないまま話しかけてくる。
「変な名前しないほうがいいよ～?変な二つ名つけられちゃうからさ～」
そういわれるまでもなく今回は決まっている。僕が弱い自分から生まれ変わるための名前。
『歩兵』
「あの……ガク?そんな弱そうな名前でいいの??」
笑ってた美青年は笑いがとまる。
「わかってないですね……歩兵はと金になれるんですよ!?強いですめちゃくちゃ!!」
「アーソウデスネイインジャナイカナ……」

若干賛成を得られないまま僕は登録を続ける。
―武器を選んでください。選ぶのはメイン武器、サブ武器1、サブ武器2、カバー武器です。

なおメインは１００％、サブは８０％ずつ、カバーは４０％の効果を発揮します。
なお初期装備に限り耐久値の減少はありません。

って！めっちゃ武器多いな！？僕はリストを見ながら思う。
剣に銃、杖、槍、弓、ハンマー、ナックラー…ジャンルをすべてあげきることが不可能に近いほど多い……。
とりあえず僕は片手剣、ハンドガン、輝刀、盾を選ぶ。

そしてスキル選択。
こっちは武器に比べれば少なく済んでいた。
パッシブスキルは何個でも装備できるそうで初期リストには表示されていない。
アクティブスキルは取得に制限はないが使ったりするときにはスキルリストというとこにいれないといけないらしくそれの設定は一日一回までしかできない上に制限として１０個までとなっている。
「ガクはどんなスキル出てるのかな～？？これ初期は個人差があるんだよね～！多い人で５０個、少ない人で１５個らしいよ？」
僕は目の前の光景に唖然とする。スキル表示が８個しか出ていない……おいおい……。
それが特別のものであることを願いながら全部取得した。基本的にすべて取得するのがセオリーらしい。

ｓｔａｇｅ３（後書き）

次回に取得スキル一覧を書きます♪

stage4

僕の取得可能スキルを取ったところ派生スキルというものがたくさん現れた。
うれしいことはもちろんだが覚える量が多い……。
美青年曰く、これまでの人生の経験が反映されそうだ。そしてスキルを増やすにはこれから経験するか、経験の書というもので覚えるらしいが経験の書はダンジョンドロップ、トレード不可なためかなり難しく基本的には条件を把握しそれに伴った経験をするしかないという。

『歩兵』スキル一覧
【戦闘技術】レベル１
―【片手剣？】レベル１
―【ハンドガン？】レベル１
―【輝刀？】レベル１
―【盾？】レベル１
【魂育成？】レベル１
―【熱意？】レベル１
【技術吸収？】レベル１
―【経験値倍加】レベル１
―【経験値貢献】レベル１
―【経験値独占】レベル１
【魔術】レベル１
―【火？】レベル１
―【神秘魔法？】レベル１
―【強化魔法？】レベル１
【神眼？】レベル１

―【アイテムサーチ？】レベル１
【不器用★】マスター
―【敵意★】
―【不遇★】
【Ｚ・生産】
―【生産の基本★】―【生産の発展？】レベル１
―【生産向上？】レベル１
―【研究？】レベル１
【勇者志望】
―【アタエラレシ運命】

ってなんだこれ……意味の分からないやつばっかじゃないか…。
ひとつずつ調べていきたい気もしたが面倒だったので使っていくうちに慣れていこうと決め美青年に話しかける。
「あの…スキル取得したらどうすればいいんでしょうか？」
「そうだね～じゃあ一回部室戻ろうか！」
「あ……あそこ部室だったんですね。いったい何部なんですか？？」
「整美部だよっ！！」
「え？整美委員会じゃなくて？？」
普通の学校なら絶対委員会認定されるような部活だろうなーと思いつつ美青年と階段を降りる。
「あと僕の名前は坂輝　准！中二だから先輩だよ～！」
どうやら先ほどから美青年、美青年といってた方は先輩だそうで…。
今日は年上の方としかあってないなぁ…。

部室に着くと先ほどとは印象が違い、さっきまで質素だったところにかなり装飾されている。
「おぉ待ちくたびれたぞガク。俺の名前は榊原　新だ。この部活の部長を務めているが中二だ。よろしく頼むぞ。」
寒気がした…あ、この人に僕は気絶させられたのかも……。

「そうそう、あともう少しであいつも来るだろうからちょっとのんびりしててくれ。」
そういわれ僕はやることがなくなった。のだが坂輝先輩が提案をしてくる。
「ガク～どんなスキルがあったのか教えてよ!!」
うわぁめんどい人だこの人。まぁ先輩だし従っておこう…自分も少し気になるし。
「えっと、【戦闘技術】【魂育成】【技術吸収】【魔術】【神眼】【Z・生産】【不器用】【勇者志望】ですねー」
「えっと～それだけ??」
坂輝先輩は申し訳なさそうに聞いてくる。
悪かったな!こんな少なくて!!!とここで榊原先輩がカバーを入れてくる。
「まぁこの後すぐに出るかもしれないしな。初期固定の【戦闘技術】と【魔術】以外だと【魂育成】【技術吸収】【神眼】【Z・生産】【不器用】【勇者志望】か。とりあえず説明を確認してくれ」
「はい。まず【魂育成】が召喚獣、ペットなどに心から接し成長を促す……ってなんかいらなそうだな……。」
「おぉ!それ掲示板に載ってないよ!!未開発のスキルじゃん!!」
と坂輝先輩は嬉しそうに述べる。いやいや、誰も持ってないからって強いとは限らないんですよ?

「えっと【技術吸収】が技術が身に着きやすくなる。【神眼】が神に与えられた眼によってアイテムの鑑定やトラップなどのサーチができる。」
「なるほどな。【技術吸収】は間違いなく優秀スキルだ。たしか准も持っていたはずだしな。【神眼】はダンジョンドロップしてまで手にしたい奴らもいるそうだ。主に探検家などを主軸にやってるユーザーはそうだろう。」
「それから【Z・生産】が生産スキル…ってこれだけ!?【不器用】

が…とにかく不器用、不遇で最悪。とにかく最悪おつかれ（笑）ってなんだよこれ!?」

「まぁまぁ～生産スキルはすごいよ!?A～ZまでがあるんだけどZは一番すごい生産スキルだよ!!……まぁどこまで【不器用】がひどいかだけど」

と笑う坂輝先輩……。とにかく生産がすごいのは当然だろう。今までどれだけの生産職やってきたと思ってるんだ…現実でも料理、裁縫、大工、鍛冶とおじいちゃんに叩き込まれたのを覚えている。

「で…これか…【勇者志望】希望に満ち溢れた勇者志望者専用スキル。強く勇者になりたいと願ったものに現れる。現時点で力はないが壁を乗り越えるたびにグレードがアップする。※派生スキルは一度しか使用できないスキルもあります。だと??」

「お～なんかかっこいいの来たね～!ぞくぞくするね!!って……ガク勇者なりたいんだｗｗ」

うわめっちゃ笑ってる!榊原先輩もこらえてるし!?

「もういいです!!この派生スキル使っちゃいますよ!!」

少しイラついたので使用回数一回の派生スキル【アタエラレシ運命】を液晶で操作し発動する。

坂輝先輩とかが爆発すればいいのに!!とおもいながら発動したものの爆発はせず目の前に卵が現れた……卵??

「おぉ、これはペットだな。そのスキルは未開発だから誰にもわからないだろうがペットに間違いないだろう。」

榊原先輩はそう興味をもっていうと、だが。とつけたす。

「ペットにもグレードがあってなー。人型ペットが一番強いとされてるんだ。俺なんかはゴーレムで准はタヌキだったか??」

「そうだけどポン吉だからね!!おいでポン吉!!」

そういって口笛を鳴らすと機械がいっぱいあった部屋以外の部屋からポン吉――――タヌキがでてきた。

「こいつは強いんだよ～?必死に育てて【変身魔法】使えるようになったんだから!」

というとポン吉に対し命令をかける。《ポン吉　変身　ポンソード》!!

そういうとポン吉は剣に変化した……え?なんかオーラ放ってて超強そう!?

「ふっふー!これが変身魔法なのだ!!強いぞ～?強いぞ～??」

アイテム表記だったのでそこに《アイテムサーチ》とコールする。

【コール】というのでスキルが使えるそうだ。

だが……アイテムサーチのレベルが4にあがっただけで読み取れなかった。

「この変身魔法には妨害魔法も追加でかかってるから弱いスキルじゃ見れないよー!」

といわれ今度の機会に強さをみることにした。

「まぁともかくだ。人型はレアなうえに強いし亜人でもすごいほうなんだ。卵ってことは…まぁ察しろ。」

そういわれ僕は泣く泣く卵をアイテム化しバックにしまう。あれ…

…さっきから取扱説明書見てないのに何で操作がわかるんだ??

そんな僕の頭を悩ませるような考えは元気がありかわいらしい声によって中断された。

「おまたせしましたー!ただいま帰還ですっ!!」

stage5

「おまたせしましたー！ただいま帰還ですっ！！」
「お、帰ってきたか。ガクいったん休憩だ。こっちは料理作るからのんびりしていてくれ」
「え…僕も手伝いますよ？？」
そういうと坂輝先輩が調子の乗っておちょくってくる。
「ガクは料理できなそうだから僕と暇つぶしだよ～」
そう笑いながら言う坂輝先輩…なに？なんだと？？
「そうですね……じゃあ僕の実力を見せつける必要がありそうですね……！！」
僕はそういいキッチンへ向かう。
「おいガク、けがしたら危ないからやめておけ」
「大丈夫です。任せてくださいよ。」

すると謎の美少女が僕に買い物袋を渡す。
「失敗したら買い直しは自腹ですよ？？」
あちゃーこれは本格的に苦手だと思われちゃってるなぁ……。
「わかりましたよ、少しでも休んでいてください。」
彼女がかわいすぎて若干にやけてしまうがさほど問題ではないだろう。
気持ちを切り替えて料理を開始する。
とにかく大事なのは味だ……見た目だけの二流はいらない……全力をかける！！
っとなぜか料理の時、いや生産の時に燃えてしまう癖はいくつになってもかわらない。
「この材料だと……は？？」
そこにはカップラーメン６つ…料理じゃないよね！？調理だよね！？
とここで動きの止まっていた僕を見て榊原先輩が声をかける。

「空乃ーやっぱお前がやってくれ。そいつ処理落ちしてる」
「は、はい！わかりましたー！」

カップラーメン??カップとラーメンでカップラーメン。
お湯を注げば3分。あれ?何か料理することあったっけ?危険てナニ?失敗ってナニ??
「は！?……あれ僕何してたんだ??」
「ごめんなさいっ！大丈夫ですか??」
なぜ謝られたのだろう……
「とりあえず新入部員歓迎会として！！かんぱーい！！」
『かんぱーい』

しかも新入部員としてはいることは確定だそうだ……なんだよもう。
若干拗ねていると坂輝先輩が飲み物を注いでくれた。
「だめだよ～ガク！そんな拗ねてちゃ！よし自己紹介しよ自己紹介！！」
とアルコールなど入っていないのにノリノリで酔ってるような坂輝先輩……面倒なかんじがするな…。
「おい准また炭酸のんだろ!?あれほどやめとけと言ったのに…。」
「炭酸で酔えるの!??!?」

「自己紹介いいですねー！やりましょやりましょ！！」
とこちらもノリノリで、顔が赤くまさに酔ってそうな美少女……かわいいから許す。かわいいは正義!!
「おい空乃また柿ピーのピーナッツ食ったな!?あれほどピーナッツは抜けといったのに…。」
「ピーナッツでこんななんの!?絶対ならないよね!?」
この部活変人の集まりなんじゃないか!?この調子だと高木先輩はいったいどんな……。
「……なにもないから。」

「普通そうだけど心読まないで！？」
１人ずつ対応してたらこれはしんｄ「ちなみに俺はチョコレートの銀紙を触ると酔っぱらうから気を付けてくれ！」
「誰も聞いてないですっ！！暴露ショーじゃないんですからね！？」
はぁはぁ……

―？？？？？わずか3分ほど経つとみんな元に戻り自己紹介が始まる。
「まずは～僕から行こうかな！」
と立つ坂輝先輩。背丈は１６０ほど、髪はさわやかな感じを失わせない程度にワックスで整えられていて、とっても笑顔が似合っている。細身の腕や脚だがあんなんでＳＢをすることができるのだろうか？？
まぁとにかく全体的にスタイルが整っていて…これは男の敵だろ…

「坂輝　准。中学二年！バスケ部所属だよ～！将来の夢は世界一の笑顔をみんなに配ること！」
「え？先輩バスケ部ってどういうことですか？？」
「この部活は掛け持ちができるんでな。それで坂輝は掛け持ちしてもらっている。」
「正確には僕が自ら掛け持ちを選んだんだけどね～！まぁこの話は今度！！次は～夕！」
と坂輝先輩の進行で進む。

「……ふぅ。」
一息吹く先輩。吹く必要あるのか？？
高木先輩は１６０くらいで坂輝先輩は細身といっても筋肉がしっかりついていたがこっちは完璧というほど細身。ぽっきりいっちゃうんじゃないか？？
なんか全体的に弱弱しいイメージを感じる。先輩は眼鏡をつけてお

りそこまで髪は長くないが前髪を束ね女子が使うようなゴムで結んでいた。違和感なさすぎでおちょくれない……。
「……っていうのが俺。」
「説明は僕の心が……っておい。」
「……将来の夢は神になること。以上。」
「唯一の説明がざっくり過ぎる……。」

「んっと説明いんだね?じゃあ姫よろしく~!」
というと空乃さんが答える。
「姫っていうのなしですー!もう…」
若干頬を膨らませる彼女はセミロングの髪に透き通った瞳に健康そうな肌…どこをとってもレベルが高い…。スタイルも一般的な女子中学生よりはよさそうで、なにより……仕草がかわいい!!!!!!!
「空乃　美歩です!中二でサイエンス部にはいってるよー!将来の夢は多くの人を救うことかなー」
「えっと何で姫っていうんですか??」
「それはっ!…ちょっといろいろあって…今は話したくないかな?」
というとちょっと苦笑いする。まぁ人の秘密をほじくるほど僕も子供じゃない。

「さて!じゃあ次はガクだよ!」
っと自分もするのか。
「えっと…佐藤　学、中学一年生です!将来の夢は……ゆ……勇者になること…です…」
「勇者ですか!?かっこいいじゃないですか!!」
「へ?」
空乃さんの想像外の反応に驚く僕。笑われるかと思った……。
「まったく空乃はまだ影響受けてるのか…だから姫って言われるんだ…」
とため息をつく榊原先輩。

「いいんです！夢を見るのは自由です！」
まったくその通りだ。

「じゃあついに部長だね！どうぞ～新！」
「俺は榊原　新。部長にして中二トップの成績を誇る。夢、いや。目標は―？―？最強だ―？―？

stage6（前書き）

isogasisisisisisi（笑えない）w

stage6

「最強――――」

その言葉が脳から離れない。
そんななか昨日は部室でそのまま泊まり朝を迎えた。
「学校…か。」
僕は仕方なく足を運ぶ。
午前8時。だれもが初めてに近いはずの教室で自ら話しかけることなど無い。
ただただスクールバトラーズの説明書を読んで読みまくる。
時々話しかけてくる強者もいたが完全無視でやり通す。

「――――僕はもう二度と失敗をしない。」
いじめられた過去、全てを失った小学生時代。
まるでその環境を乗り越えた僕は自分で言うのもなんだが高校生、いや社会人ほどの精神力を身につけたと言っても過言ではない。
淡い記憶とともに彷彿とする思い。
そんな思いとともに説明書を読みあさった。

気づけば午前授業が終わり帰りのＨＲが終わった。
この学校では午前中のみの授業しかない極めて珍しい学校である。
しかも単位制。その選択単位でさえ珍しいともいえよう。
例えばだが［技工作？］この授業では技術を活かした工作をするものだが、［思工作？］だと思考力を活かし工作する授業となっていてなぜそこまでこだわる必要があったのかさえ謎な学校である。
どうやら、「生徒一人ひとりの特別な技量、知量、力量を伸ばし個性的な生徒を育成する」というのが概念らしい。

そんなことを思っていると教室のドアが開く。
って…高木先輩…
「単位選択の希望は出しておいた…これから部活」
相変わらずの要点集中型会話をぶち込んでくる。
要するに僕の選択単位は勝手に決められてしまったそうだ…やれやれ…

部室に行くとそこには榊原先輩が武装して立っていた。なぜ!?
「お、来たなガク!」
どうやら完全にガクという名前で固定されたようだ。
「なんですか…その装備は…」
「よく気づいてくれたな!これより祝戦会を行う!!ルールは簡単だ、モンスターと戦うのみ!」

場所は体育館…どうしてこうなった。
目の前に現れたのは自分と同じくらいの身の丈モンスター。
兜をかぶっていて鎧はガチガチだ…【アイテムサーチ?】をコールする、が、弾かれる。
「この敵強すぎません…??」
「キュオアァァァァァ!!!!!」
「ひっ!!」
ものすごい勢いとともに敵がぶつかりに来る。寸前で回避するもこちらは戦闘態勢には入れない。
「ガク!これはゲームだ!!何恐れている!!お前は勇者になりたいんじゃないのか!?」

その言葉が心に響いた。その言葉は一瞬だった。
「――――そうだ。これは、ゲームだ。」
無心に、かつ冷静に。

先ほど先輩に渡された剣を引き抜く。剣といっても刃の部分はない。
そしてコール。【実体化】！！
これによって剣の刃部分が現れる。原理的には高エネルギーの周波対やらなんやら。僕には難しくて理解ができないが、この剣で干渉できるのはカードを挿してゲームにログインしているユーザーと、そのゲーム内の物体のみ。
開発サイドも上手く作ったものだ。

冷静になった僕はまず敵に向き合う。
敵が振り払う刀に上手くぶつけるように軌道を合わせ振り切る…がうまくいかない。
敵の刀だけが僕の左腕を掠める…痛い…ただのＶＲゲームでは感じることのない痛覚。
それがゲームでありながらも現実であることを思い出させる。
「こんなの…ゲームじゃないだろ…」
このゲームにおいて痛覚はあっても実際の損傷はない。
左腕を掠めてもそこに傷跡があるわけでもないのだ。

互いに剣を交える。おそらくもう１０分ほど交え続けただろうか。
ではなぜ１０分も交えたか…答え合わせと行こう。
「右斜め上より斬撃！」
相手の初動モーションさえ見ずに剣の軌道を合わせる。
キンッッ！！！
「腹部への刺突！！」
これに対してタイミングを合わせて下から剣を振り上げ交える。
キャィン！！！！！
敵にこれで3秒ほどのスタンが発生する。
そしてガラ空きの胴体に向け全力でスキルを詠唱する。

【炎？】―【ファイヤーボム】

超近接攻撃魔法、威力値６５
敵への干渉のみ、１％で火傷ダメージ追加。初期魔法の中では優秀な攻撃魔法。

「…初勝利。」
目の前に広がる景色。
敵はＨＰバーが０になり砂状化してドロップアイテムが自分のストレージに収納される。
戦う時はまったくもって画面上に手動での操作がいらないため戦いやすく、戦闘以外ではこうして手動によってアイテムの管理やステータス、スキルなどが管理できなかなかいいゲームじゃないか…！！

「ふっ、ガク。お前ってやつは習得が早すぎるんじゃないか??」
「いえいえ、根っからのゲーム好きなだけですよ。」

こうして僕、佐藤学はスクールバトラーズへと参戦した――――

転章？（前書き）

夏休みなのですこし書く時間があるので小出していきます！

転章？

「次は東京～東京～」
電車のアナウンスが鳴り響く。もちろん誰ひとりとして他人の事情など、しったこっちゃないのはいつになってもかわらない。
いや、むしろかまって欲しいなど一言も発した覚えはない。
…が、この容姿であったがためか中２であるというのに周囲からは尊敬と嫉妬、大人びた雰囲気がすばらしいと大人は絶賛。
彼女は呟く。バカバカしい…と。
容姿などに気にしたことはない、全て母が勝手に髪を染めたりなんやかんややったただけであって自分には関係ない。

何より大人びた雰囲気…などという言葉は気に入らないにも程がある。

だってそれは――――

東京駅、かつては人で溢れかえっていたこの駅も今や地元のスーパー並みにスカスカだ。
一歩入りどこを間違えれば不良や暴力団にあう危険だってある。
「なぁそこのねーちゃん！俺と遊んでいかねーか」
…彼女は言葉を失う。
見たところ２０代前半、いかにも不良ぽくあぁ不良かとおもうほどだ。
「…お願いだからどいて。もう疲れてるの。」
そう話す彼女は今日青森から出てきて既に５回ほどの既視感を抱いていた。

「素直にどく奴がいるとおもうかばーか！」

それと同時に男は背後に隠していた木刀で殴りかかってくる。
「…はぁ。」
あたりの状況を飲み込み彼女は最低限の動きで木刀を回避する。
「くっ……そ!!」
男は木刀をただ振り切る。まるで子猫が猫じゃらしでも必死に掴むかのように。
いくら人がいないといっても目につくくらいの人数はいるためだんだんと野次馬が集まってくる。
彼女が木刀を避けるたびに歓声が起こる。
と、流石に人だかりができれば駅員がやってきた。
「大丈夫ですか!?」
人だかりから出てきた駅員に彼女は振り返り、笑顔――もちろん作り笑顔だが――で答える。大丈夫です――と。
その刹那――背後にいた男は倒れた。
観衆は笑う。スタミナ切れか、情けないな…と。
乗り換えた電車に乗り込むと彼女は微笑む。それは冷たく、まるで世界の全てを見透かしたかのように。そして、まるで自分に敵がいないことを悟るかのように…
【プレイヤースキル】…それはシステム上ではないプレイヤー本人による技術や経験によるスキル。
青い髪、青い目、中学生とは思えない大人びた容姿、そして無駄な脂肪がない体つき…彼女、蒼園　舞は【プレイヤースキル】を全プレイヤーでもっとも多く所持しているプレイヤーでありそんな彼女は周囲から「ゴースト」とよばれることもしばしば。
そんな彼女が今回青森から東京にきた理由はただ一つ。

「いったいどれだけの収穫があるのか…楽しみね。」
スクール・バトラーズ。それは彼女にとって自分の力試しになっていた。

大人びた雰囲気。
だってそれは――――幾千ものプレイヤーを自らの手で敗北へ追いやった強さの表れであるから。

ｓｔａｇｅ７

Ｄａｙｓ　４／３

昨日、初勝利を上げた僕はその後先輩にゲームプレイについてかなり叩き込まれた。

正直、５時間も休憩抜きで寝ずに聞いた僕を褒めて欲しい位だ。

ノートをとっていたので話が終わってから二冊目のノートにまとめ直したとこで昨日は夜飯を食べて、いつの間にか一日が終わってしまう。

あれ…もしかしなくても一日中ゲームのことを考えてるんじゃないか？

今日だって午前の授業がホームルームなのをいいことに昨日まとめたノートから自分なりのスタイルの確立や、これからしなければいけないことをピックアップしていた。

自分なりのスタイルという面ではこのままでいいだろう。

片手剣、ハンドガン系でのサポート込みの突撃型。

このゲームにおいてステータスは実際のプレイヤー能力だ…が、運営としてもそれではただの力比べになると感じたのか、ステータスが用意されている。

またこのゲームではレベル制限やステータス不足を体に重力をかけることでゲームとしての公平性を保っている。

結局は現実でのステータスで差はあるもののそれでもゲームを極めれば現実での強い敵も倒せる可能性が生まれるというわけだ。

力…これによって上半身の重力が減少。近接攻撃力上昇。

速…これによって下半身の重力が減少。【ムーブウェーブ】ＳＰ消費軽減。

【ムーブウェーブ】…未知の能力によって手動操作で自分の体を自由に動かせる。

防…これによって【ダメージシールド】の範囲、軽減率上昇。（選択）

【ダメージシールド】…自分の周囲ａセンチに空気によるダメージ軽減のシールドを張る。効果時間１ｈ。

知…これによってＳＰ、魔法力上昇。トラップ解体力上昇。

精…これによって命中上昇。トラップ解体力上昇。

運…あらゆる運要素（１０種）がランダムで上昇。

と以上の６ステータスによって構成される。

自分は決まっている…速、極振りだ。

ムーブウェーブとやらを使ってみたが信じられない難しさだった。

が、どのゲームにおいても結論は一つ。非効率的、操作難題、あまり人が選ばないものが化けることは多々ある。

なんせＭＭＯにおいて人と同じことは不利を生む。

それゆえに僕はこのステータスを上げる…

そして何より他のものを上げたとこでたいして筋力もない自分がまともに戦えるかと言われたら答えはＮｏ。

それが決まれば初期ボーナスを全て速に振る。

このゲームはレベル制ではなくスキル制のゲームである。

そしてステータスボーナスは対戦勝利時や、ログインボーナス、そしてタイトルによっておもに入手できる。

何よりすごいのがランクシステム。
レベルこそないが強さはランクによって表現されるといっても過言ではないらしい。
自分はランク1。
現在確認されてるランクは7。
ランクは運営から週間ごとに判別があり日曜日に上昇できる可能性がある。
ランクがあがれば全ステータスの底上げ、ダンジョンの解放、スキルの上昇など様々なボーナスを得られる。

僕はそうと知ればまず今週の目標はこうだ。
「今週末にランクを1上げる…！」
バカみたいだが問題ない。
なぜなら…とっておきを見つけたからだ。

ｓｔａｇｅ８（前書き）

ひさしぶりすぎで設定軽く忘れてた…黒歴史ノート助かるね（）

stage8

Ｄａｙｓ　４／４

今日僕はなぜか高度自衛隊訓練場に来ていた。

いや、まじでなぜ！そもそも聞いたことのない場所でなんでもあまり公になってないらしい…いや危険臭がするんですが。

「え～それではまずみなさんカードを差し込んでください。」

といわれ支給されたカードを差し込む。

これは学校の授業。【戦闘術？】の授業。

この学校はＳＢを導入している。いやおかしいだろ、ゲームを導入っておかしい。

そして周囲の学生はみんなごつい。なんでだよ、なんで本気自衛隊みたいのがぞろぞろいるんだよ…。

支給されたのは一年間お世話になるカード。このカードでこの授業選択者の成績が保存され授業終了で回収となる。

そして驚くべきは個人データ、つまり放課後などに強くした自分のデータでプレイが出来る…スキルなどのＥＸＰも増加…え、最強じゃないか！！

…さてこんな調子から結論を言おう。

辛い。

ここのプレイヤーはみな初期データ。つまりリアルでの能力がほぼ反映される。

僕に勝ち目はなかった。剣術、銃術、魔術。どれをとっても勝てない。

こいつら、ぜったい関わりたくない。もろ自衛隊だ。

「では今日最後の授業として模擬戦闘を行う！」
「しゃぁあぁぁっぁあぁっぁ！！」
盛り上がるほぼ軍人たち。だから怖いって！
だが…これで少し勝算が見えた。これなら少しくらいは。
と思ったのも束の間、僕はこのクラスの誰ひとりとして勝つことはできなかった。
「なんでだよ…！！」
泣きたい衝動を抑えつつもただただ願う。
――僕は勇者だ。負けてばっかの勇者なんて。

授業終了。
それとともに僕はなりふり構わず部室へとダッシュする。
「先輩！！」
「どうしたガク。珍しいな、こんな早いなんて」
「榊原先輩。僕は先輩方の強さが欲しいです…。お願いします！強くなりたいんです！」
榊原先輩は持っていたコーヒーを机に置き僕を見る。
「お前…それでいいのか？」
「え…？」
「まぁいい。わかった。では屋上に来い、そこで見せてやるよ…お前の求めてる答えを。」

あたりは静まっていた。
屋上はすり減っている床以外に特徴的なものは何もない。
「さぁ、戦闘態勢を取れ。」
「え？？」
榊原先輩の言う意味がわからず立ち尽くしていると

「無駄な説明はいらない…行くぞ！」
走りこんできた！！
「え！？バカなの！？」
僕もしょうがなく対応する。
榊原先輩の手には刀。僕の片手剣と質が同じくらいのようだが…持つ人が持つ人だと強そう過ぎません…？？

応戦するものの思ったような軌道に振れても圧倒的に力負けして弾かれる。
「あああああくっそ！！なんでこんなに剣重いんだよ！！！！！」
剣を振った後は思い通りに振り切れるわけではなく剣に振られている。
榊原先輩は僕の攻撃を見切っている…それを踏まえあえてまだ反応できる範囲に刀を打ち込んでくる。
…なめられている。
当然プレイ的には格上だ。それでも僕は。

上級者だから手加減するという行為が嫌いでならない…！！

「…つぉぉおおおおお！！」
全神経を剣に委ねる。
剣に振られるなら体をないものだと思えばいい。剣の1番力のいらない方向に振り切る！
ここで初めて先輩の刀をわずかに押した。
しかし先輩は不敵な笑みを浮かべる。

「…いい顔してるじゃねーか。そんくらい真剣になれ、もっと多く経験を積め。このゲームで1番必要なものは経験量だ！！経験量によって他のプレイヤーとの差をつけろ！！！」

剣が刀を吹き飛ばす。
先輩の隙だらけの体に剣を払う。
…はずだった。
払おうとした剣が止まる。
そこには先ほどの刀とは全く違う刀とも言えない刀身の太い両手剣。
そしてそんなみるからに重そうな剣を左手一本で支え僕の全力の攻撃を抑え込んでいる。
そして驚くべきはそんな剣を持ちつつも、右手にさらに重そうな剣を持っている。
「…経験だ。」
一瞬の痛覚に意識が飛ぶ。痛み自体は注射の針、それ以下でもそれ以上でもなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9115ca/

スクール・バトラーズ 【SB】

2015年5月3日00時59分発行